向陽新聞

高知市塩屋崎町1の2
土佐中・高校新聞部
編集人　藤宗　俊一
発行人　丁野　貢一
印刷　高知印刷

高橋
写真館
大丸東 ② 6758

# 第36回高校選抜野球大会　ベスト4に輝く

## 見事なグランドマナー

## 海南に無念の敗退

第三十六回全国高等校選抜野球大会は、去る三月二十八日から甲子園球場で開催され、四国徳島県代表海南高校が尾道商業高校を破り、真紅の大優勝旗を獲得した。本校も、安芸高校と共に高知県代表に選ばれ、十一年ぶりに甲子園の土を踏み、浜松商業平安高校を連破し、ベスト四校の一つに勝ち残ったが、準決勝で、同地区代表徳島海南高校に一対零で惜敗し、前回の出場の際（準優勝）には及ばなかったものの、堂々たる成績を残した。また、成績の面のみでなく、守備交代を全力疾走でするというグランドマナーの面でもすばらしい成果を収めた。

一回戦は、クジ運よく不戦勝し第二回戦への闘志をひそめて最後の練習にのぞんだ。

二回戦は東海地方代表浜松商業高校。甲子園を初めて踏むせいもあって、選手はあがりぎみ。ようやく三回、一点を先取した際はグランド全体が割れんばかりの拍手の渦。ブラスバンドの高らかな進軍ラッパと共に、バトンツワラーが大熱演。しかしその裏、三点を奪われた時はさきほどとうって変って静まりかえる。ところどころ「ガンバッテー。」という黄色い声も聞かれる。そのまま二回くらい過ぎる。このまま終ってしまうのではないかと、心配されたが、六回、中心打線が爆発し、同点。この時には皆の顔にも希望の色が見えはじめた。七回に六基の甲子園の大照明燈がともり、夕闇の中に球場全体がくっきりと浮びあがった。広いグランドを青白い光が照らし、その中を本校選手がきびきびした動作で守備交代をする光景はなんともいわれないものであった。「やはり高校野球ではなくては…。」という声が聞かれた。その後は好機もあったがついに三対三のまま延長戦に入った。十回表先頭打者がエラーで出塁。進軍ラッパが百万燭光の光の中で鳴り響く。観客も選手の一挙一動に心を奪われる。続く打者打者は安打四球などで一挙四点をあげ勝負を決した。試合終了後、校旗が校歌の演奏の中に夜空の中へのぼっていくのを、選手も応援団もじっとながめていた。

三回戦は優勝候補筆頭の桐生高校を破り、破竹の勢いの地元平安高校。試合前の予想では土佐のやや不利。そのためか、それとも二回戦の勝利のためか、前回の時よりぐっと観客がふえて大会気分が盛り上った。観覧席には二匹のクジラがもちこまれ、陣笠を被って大応援。土佐は押し気味に試合を進めながらも決定打がなく、かえって四、五回一点ずつ点を奪われたしかし五回の裏安打四本が放され一挙同点。その後は土佐のペースで試合は運ばれる。七回二点を得た時はもう勝利を決したかと思われたが、九回平安高校の猛反撃にあい一点差に追われ、なお、一打同点という瀬戸際に立たされた。応援席は静まりかえる。しかし、島村投手はよく後続を断ちセンターボールに再び校旗が翻った。

夢の球場　甲子園

準決勝は徳島海南高校。四国大会では顔を合わせなかったが、それまでの成績は二勝一敗。試合前の観客席には笑い声が一杯。サイレンと共に試合開始。戦いは打撃戦でなく投手戦となった。海南高校は本格派尾崎投手。本校は技巧派島村投手。投手戦のためかそれとも暑さに茹れたのか観客席は普段と違って一寸静かであった。四回、セフティーバンド安打安打の後盗塁し、一死二塁三塁打順は四、五番という絶好のチャンスをむかえ、今までと打って変ってスタンドは沸き返った。しかし応援の甲斐なく尾崎投手の前に屈し先取点をあげることができなかった。六回海南高校に一死の後、二連続安打を奪われ、絶対のピンチに見まわれた。ここで島村投手は上ってしまったのか、スクイズを警戒しすぎたのか、大暴投を行い、ボールがバックネットへ転々とする間に三塁走者は小踊してホームへ駆けこんだ。この出来事に応援団は茫然。まったく静まりかえった。その反対に海南高校のベンチは歓声の渦。タイコの音がドンドン響いてくる。その後は二打者を簡単に打ちとって、この難をのがれた。それにしても惜しまれる一投であった。試合は七、八回の破乱もなく、九回の裏の必死の反撃も空しく無念の涙をのまなければならなかった。しかし、大会前の予想では、あまり騒がれなかったが、すばらしい気力とでベスト四の一つに残ったという事は賞讃に値するものである。

又、本校選手の守備交代の際、全速力で駆けて移動する動作は、大きな甲子園球場の中でひときわ目立って見え、そのグランドマナーの良さは観客の心をとらえた。この動作は第三試合での不利の際も確実に行なわれ、それにつられるというほほえましい事態が発生し投手戦であった為もあるが、一時間四十五分という非常に短い時間で終了した。

試合終了後、引きあげる本校選手に、甲子園の全観衆はおしみない拍手を贈っていた。そしてどこからも「よくやった。」という声が聞こえ「夏こそ大優勝旗を勝ちとれ。」と励ます観客もいた。大会後も本校の選手のグランドマナーの良さに感激した人々から学校へ次のような手紙がたくさん送られてきた。

選抜野球大会では大変御苦労様でした。もう見ていて溜め息が出るばかり…。最後の試合なんかもうとめどもなく涙があふれるばかりでした。でも私は見ていてちっともくやしくありませんでした。それはきびきびしたグランドマナーすばらしい試合運び。すごく高校生らしいもん。どうか夏の大会も出場して下さい。お願いします。そして私達ファンが春の大会で流した涙を今度は喜びの涙にかえてくださることをお願いします。

ではお体を大切に。

さようなら

東京・一女学生

## ひとこと

### 旧グランドに手入れを

○…六月〇日、雨。梅雨の季節ともなれば連日うっとうしい天気である。校庭を見ると水が一面にたまりまるで沼地である。

○…その時気がついた、校庭の砂場に砂がない。砂のかわりに土くれ、石コロが入っていてその上草まではえている。そしてそのそばの鉄棒には棒が通ってない。そしてサッカーのゴールの柱がない。ないものばかりで何かあるものは、と思って見ると、校庭のまわりのネットに穴がある。いったいネットに穴があるのか穴のまわりにネットをはっているのか判断に苦しむ。ヒドイもので一度校長に見てもらいたい。いや賢明な校長がこんな事位に気がついていない筈がない。恐らく早く直そうと手を打っているのでいるのでしょう。しかしそれにしてはなかなか直らない。

○…学校の付近の家はたびたびボールが飛びこんできて大きな迷惑をこうむっている。ボールが飛びこむ度に取りに行くのでは行く方もしんどいが来られる方こそいい面の皮である。一日に何度もボールに飛び込んでこられては静かな落着いた生活もあったものではない。学校にどなり込んでくるのも無理はない。こんなことをほっておいたら対外的な恥ともなる。

○…体育の時間、これは人に聞いた話ではあるが、砂場の向うの小さな方の鉄棒なんか一人ぶらさがるとグラグラと大揺れに揺れて危険なことおびただしいという。あんなに揺れてはいつか事故の起こることは必定であるとその人はフンガイして言った。本校の生徒は機械体操が非常に苦手だがこういう設備では無理もないのかも知れない。

○…新グランドの方は大そう立派である。砂場にはチャンと砂がはいっているし、周囲の金網は仲々たいしたものだ。その上ブロック製の新しいキレイな便所も出来たようだ。そして何やら建物も建てられている。それだからこそ旧グランドの方の設備の悪さが目立つのだ。

○…学校側も早く良くしたいのだろう。まさか気がついていない事はないのでしょうから、お願いしたいのはただそれを早く実行していただきたいということだけなのです。（K・I）

## 主張

### 各々の部を重視せよ

### 野球至上は否定できない

期待されたわが校野球部が甲子園においてみごとそれにたがわぬ活躍を見せてくれたことはわれわれ土佐校生にとって喜びにたえないことである。甲子園での、その純真無垢なプレーとりっぱなグランドマナーは高く評価され、多方面から数々の賛辞が寄せられている。

しかし、そうかといって突発事変ともいえる今度の野球部甲子園遠征には果して一点の問題点もなかったのだろうか。四月八日付け高知新聞の朝刊に〃野球至上はイヤだ。スポーツに上下はない〃という見出しでこんな投書が載ったのはすでに御存知だろう。「本校の野球部は甲子園に行った。校長以下一部教師はわれを忘れての喜びよう。寄付金を集めるといって、目標額三百万円とし、在校生一人一千円と頭割りした。現在における野球至上を認めるとしても不可解である。スポーツに上下貴賤はないはず。本校の庭球、柔道、登山部が全国大会に出たさい、どれだけの援助をしていただけたろうか。わずかスズメの涙ぐらいのものだ。しかも精神的には何もしていただけなかった。野球一辺倒はやめてもらいたい。〔高知市土佐校生＝十七歳〕。」この投書がほんとうにこの生徒だけの不満だといえるだろうか。また生徒間に「学校側は野球一辺倒だ。」という感じを与えたものは果してこの一事だけだったのだろうか。校長は講堂のステージの上から力強くこの投書を否定したのだったが………。

今度のこの遠征費については表面上、学校はノータッチという立場を取っている。つまり、〃この寄付金は振興会の自発的な行為によって集められたもので、学校側としては干渉するわけにはいかない。むしろ、ありがたく受けとるべきである。〃という態度なのだ。しかし、実際はこの振興会の寄付金集めには野球部後援会の積極的な働きかけがあり、またこの後援会には校長および本校職員が加わっているのである。これでは学校側がほんとうにこの寄付金集めにノータッチであったなどとはいえないのではないか。

今まで他の部の遠征について学校がこれほど熱意をしめしたことがあっただろうか。その部の遠征に充分まかなえる費用を出したことがあっただろうか。最低限の遠征費で相当な個人負担を覚悟しなければならない他の各部からすれば、この野球部の堂々たる遠征は学校側の差別待偶と見えてくるのも当然のことであろう。

他の各部から見れば学校の差別待偶は一つこの事にとどまらないはずである。野球の試合のある日は朝礼を通じて生徒間に応援を希望する。他の部ともなるとその報告さえもしない。球場には校長じきじき必ず観戦に行く。さて甲子園出場が決定すると帰校する野球部部員を玄関に出迎えてその健闘を讃える。万才三唱。昨年度三学期の終業式においても「諸君は野球部の遠征を華やかなものに考えているかも知れないが、しかし彼らはクタクタになるまで練習し、その成果が実ったのだ。」とことさら野球部だけに焦点をしぼった話をする。これで野球部を特別あつかいしていないといいきれるだろうか。他の部の遠征に際して学校がいつこれだけのことをしてくれただろうか。

現在野球人口数百万という。まさに野球はスポーツの花形、甲子園で活躍でもすればたしかに本校の名声もあがるだろう。それは我々土佐校生の名誉でもある。しかし、そうかといって学校が野球部だけを特別あつかいしていいというわけはない。むしろ、そういう風潮を防ぐ方向をとるべきではなかろうか。何も野球部の待偶を落とせといっているわけではない。しかし野球部においてできることをなぜ他の部にはしょうとしないのか。他の部に野球至上の観念を植えつけないためにも、また、それぞれの部の奮起を促がすためにも、これからはもっともっと各部各々の活躍を重視してほしいものである。

## 後援会は必要か

### 必要な資金援助

野球部が甲子園出場のために行った資金集めによって、後援会の存在がクローズ・アップされた。現在、後援会の存在する部は野球部のほかには、バスケット部のみでありこの二つの部は後援会より予算のほかに相当額の金銭援助を受けている。その使用途の性格は次のように多少異なっている。

**野球部**

会員は明確化されていなく、金銭援助を行った者が会員である。そのため、先輩、部員の父兄、本校存校生の父兄などまちまちである。年間援助額は十万円位で、用途は後援会には関係なく、校長先生、顧問の先生の検討の上、決定される。その内、大部分が予算の補助で、他は招待野球や遠征の補助である。

**籠球部**

ほとんどの会員が先輩で固められ、通常年間六万円程度の援助を受けている。その使用徒は全額遠征に使用されている。

以上の事が現在の後援会の実態である。しかし後援会問題に対しいろいろな意見が上ってきており、後援会の立場が問題になっている。

**生徒会会長談**

後援会というものは現在の向陽会予算から必要だと思う。ただ疑問に思うのは野球部の後援会援助金の中に一部振興会関係のものがあることである。それは学校全体の振興会からの補助であるから特別なクラブのみに与えるものではないと思う。

**T君談**

後援会は他の学校の例をあげても数百万という援助を受けているところもあるし、実際必要だと思う。しかし、立場を明確化してもらいたい。又行き過ぎの傾向が見られる。後援会というものは特定の部のものであって学校全体のものではないはずである。その後援会に学校全体の責任者である校長が一寸力をいれすぎてないだろうか。

**S君談**

現在野球部は予算請求の際に、二十万円しか掲示していないが実際四十万以上もする事実からして、他を後援会にたよっていることになる。そうなるとあきらかに後援会が生徒会活動に介入しているのではないか。

以上が批判的立場の人々の意見である。これらの意見に見られるように、一応後援会の必要を認めながら、現在の後援会を行きすぎと見、より立場を明確にというのが共通の望みである。

まず第一に校長先生、後援会の立場について、

**校長先生談**

私が野球部後援会に関係しているというのは偏見である。私個人として野球部に後援したことはあるが…。後援会は学校や振興会に団体として関係しているものではない。今回の資金集めも振興会に後援会が働きかけたものでない。後援会は単なる資金援助の団体でなく、精神面からの補助を行っている事を忘れないでもらいたい。

又、後援会の部活動介入の件については。

**片山先生談**（野球部顧問）

他の学校では特定の部に対し強い力を示すなどの例が見られるが、本校ではそういう事はありえない。又、予算請求の際は他の部に対しての事で、後援会の収入を見込んだものではない。もし現在後援会の援助を断るとすれば、他のいくつかの部活動を麻痺させるであろう。

**野球部一部員の話**

後援会のあるということは知っているが、別に気にかかるような問題ではない。後援会があるといって他の部とあまり区別されてもらいたくない。

**バスケット部部員の話**

籠球部の場合はOBばかりで構成されているので、精神面からの指導もしていただける。後援会というものは部の延長のような感じもする。

## 一円不足の影響

### 売店値上げ実施

今月始めから、売店のノート代が二円値上りして、元の値に戻った。その第一理由としては、売店の従業員の人権費の値上げがあげられている。これは職員の値上げに伴い売店でも四月から「わずかではあるが」実施されている。第二におつり用の一円硬貨の不足である。一円玉の不足は全国的な傾向であり、当時潮江の四国銀行と相互銀行に頼っていたが、思う様に手に入らなかった。また生徒自身が一円玉で支払いをすることは窮めてまれで、一円玉不足の傾向に一層拍車をかける結果となっていた。最後の理由としては、半端な値段だと毎日の計算に手間がかかり、能率が悪い事が上げられている。渡辺先生の話によると、値上げを含めいっさいの売店の運営は渡辺先生に一任せられており、今度の値上げも、売店担当の五人の先生方と校長先生との承認を受けて、五月から実施する予定だったそうである。しかし一応生徒に連絡する意図で第三回議会で発表したところ反応は意外に大きく、やむなく値上げを一時停止せざるをえない状態であった。その為今月より実施されたものである。

現在売店には一年間に約百万円相当の純利益が上がっている。おもな使い道は、夏休みなどにおける各部の遠征費や生徒委員会関係などで昨年末行われた池田弥三郎先生の講演の様な際にもその謝礼が、売店から支払われている。また年間約五～六十万円の貯蓄があるそうだしかし一部の生徒からは、学校の売店は利益を追求せず、あくまで生徒に奉仕すべきだという鋭い批判も聞かれた。

## 品質保証でおちつく

### 体操服問題

この四月より体育課は高校生千余名を対象に、男子は白帽に本校マーク入りのユニホームを、女子は今迄の体操服にマークをつける旨を伝え、その普及につとめてきた。これは学校側が、本校の教育方針の一貫として、三年前に全校生徒を対象に体操服制定計画をたて、その最後として実施したものである。中学ではすでに実施されており今回の実施とで、中高は統一された体操服を着用することになったわけである。実施当初、生徒間や委員会に大きな反響を呼んでいた。その原因としては、①今持っているユニホームが無駄になる。②品質が悪い。③制服そのものに反対である。④強制的であるし急である、などが上げられる。これについて体育課の松木先生は心身の統一、外観の統一美、全国的な風潮、などを上げて、生徒の制服への反響に答えていた。一時大きな盛り上がりを見せていた制服問題も、委員会と学校長との間で、品質保障という線であゆみよりを見せ、下火になってきている。だが、品質についてはまだ不満の声がきかれる。このたびの反響をしめる『制服』というものについては、今後考えてみるべき余地のあるもののようである。

## 先輩大学生に聞く会

新聞部では例年どおり夏季休暇を利用して先輩大学生に集まっていただき、将来の進路決定・受験勉強・大学生活など、いろいろ参考になる体験を語っていただく計画をしております。

お忙しいことと思いますが、時間をさいて多数ご参加下さい。なお詳しいことはおって掲示板などでお知らせします。

○……七月二十五日午後一時より
○……一時より図書館
その後、高三各教室で学校別座談会

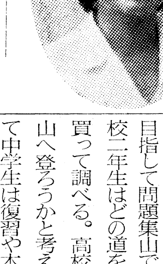
（向陽新聞部）

## A.F.S.留学生

## 井上さんアメリカへ

本年度のAFS留学生の一人に本校の井上則子さん（二T）が決まった。井上さんは英語が大変好きだそうで中一の時はじめてAFSのことを聞き、「ぜひともアメリカへ留学したい。」と望むようになったそうだが今度その望みがかなったわけである。AFSとは個人的な団体で、第二次大戦後、留学制度によって国と国との理解を深めようという主旨のもとに活動を続けている。すでに世界的となったこの組織によって世界のほとんどの国々から留学生が集まっている。向こうでの下宿先は六月十三日決まったばかりで、イリノイ州スコーキの弁護士の家、ナイルズタウンシップハイスクール（イースト）に通うことになっているが、まだアメリカからの通知がないので学校のようすや町のようすはわからないそうである。なお出発は今年の七月三十日羽田から、帰国は来年七月頃だということである。

**井上さん談**　発表の時は何ともいえない気持でした。でも最近ではうれしい反面、未知の世界に一人でとびこんで行くような不安な感じがします。アメリカでは日本では得られないこと、特にその家庭生活を経験したいし、また日本人の理解にも努めたいと思います。



## 新潟募金集まる

新潟地震被災地への見舞は生徒の協力を得、四万七千五百三十四円の金額を達成した。そのうち四万一千百七十四円を毎日新聞社主催の募金に、他を私立学校関係の募金に協力した。

あるクラスでは三千円以上の募金をしたところもあるが、あるクラスでは一度もっていったけれど、「少いから集めなおせ。」といわれたということである。X君はこれについて「募金はあくまで善意のものであるべきだ。」と不満をぶちまけていた。

## 新築の下調べ

このほど、本校々舎新築の予備調査として、本校敷地内で四カ所のボーリングが行なわれた。校舎新築は老朽化の必然の結果として起る問題だが、今回のボーリングは具体的な表付けのあるものではなく、単なる参考ということになっている。なお、ボーリングの結果は、七月初旬判明したが、校舎新築はそう遠い未来のものではないと見られる。

## 校内短信

平林泰人先生（英語）は身体上のご都合で去る五月三十一日付けで退職された。

## らくがき

▼今日も雨。明日も雨だろう。そして明後日も…。まったく鬱陶しい天気である。天気予報を見ると東方海上、西方にそれぞれ高気圧があり、その境のところに丁度日本がある。その境に温帯性低気圧がさまよい、日本列島の上には停滞前線が続いている。これで雨が降らないと不思議なくらい典形的な梅雨型気候配置図である。▼この梅雨は暦の上では夏至の後の庚（かのえ）の日に明けるという。そうすると今年の梅雨明けは六月三十日。空はこの日を境にして晴れあがることになる。しかし、それと反対に生徒の心はよけいに憂鬱になっていく。夏休みの資金の多寡を定める天秤にかけられるからである。▼そして無事？峠を越える。眼下には自由な世界が始まる。先生にも又自由な世界が始まる。授業料を払って昼寝をしにきた者も、弁当を食べに来た者も、モウネー金を払って先生に夏季休暇を与える。▼猫君も曰く「教師くらい楽な仕事はない。我輩も人間になったら教師になろう。ニャンと楽な仕事なもんだ。」と。先生曰く「教師くらい辛い者はない。先徒が勉強しないで、大学に合格しなかっても『先生が悪かった』といわれる。もうセンセー（全然）やる気がしない。」と。だから先生に迷惑をかけないようにと思う人々は「今年の夏休みこそは…。」と▲高校三年生は山を目指して問題集山で予備練習。高校二年生はどの道を選ぶか地図を買って調べる。高校一年生はどの山へ登ろうかと考え初める。そして中学生は復習や本を読んだりして山に登る体力を養う。▼以上の事をするには夏休みは絶好の機会である。大学へ行こうと思って本校に入学した諸君はこういう事は知っている。しかし知っていてもなかなかできないものである。今年こそはと思って参考書や問題集をたくさん買い込む。そして日に数時間という計画をたてる。初めの二、三日は順調に進む。しかし四、五日となるとテンポがみだれ、六、七日となると読みとなり、八、九日となるとツン読（積んどく）となる。そして、山は山でも、山へ、海へ体がはしっていく。▼頭のよい諸君のことであるので分っていると思が、コツコツとやって今年の夏休みをふりかえって、有意義であったということのできるように過そうではないか。（S・F）

サンゴはぜいたく品ではありません
りっぱな工芸品です
土佐の名産サンゴにカッオと
全国に知られています
土佐名産サンゴと
装身具は
池田珊瑚店
高知市帯屋町一丁目
TEL ② 0358

美しい　フジカラープリント
スピード仕上………2日
キタムラカメラ
堺町19　TEL②3154～6

信用あるお店で安心したお買物を
通学用・旅行用・かばん・袋物
マエダ
かばん店
高知市帯屋町18　②8600・8601

# いかに使う？休み時間

## 表われる内塞性

### 最も多い雑談組

休み時間のベルが鳴り響く。教壇から先生がおりる。十分、または昼休みの二十五分間、本校生徒諸君はどのように過しているのだろうか。新聞部でとったアンケートからもおもしろい結果が出た。本校の一風潮を示す例ともなろう。本校生徒諸君の行状、休み時間への考え方、調査してみるのも一興というものであろう。

**A君の場合**ー休み時間のベルが鳴る。起立して礼。そうして次の時間まで雑談にふける。

「おい、あの映画……」「うん、この前見たばっかりよ。」「それなら……この映画は……」「それも大分前に見た。」「よし、それならこの映画はよ？」「ああ、見た見た。」

話題は豊富。映画の話、勉強の話、スポーツの話、食い物の話、文学の話。そうして休み時間の十分が過ぎさる。

**B君の場合**ー勉強。次の時間の予習。読書。雑談。

**C君の場合**ー雑談。体育館でバスケットボールをする。

**D君の場合**ー騒ぐ。時々便所に行く。

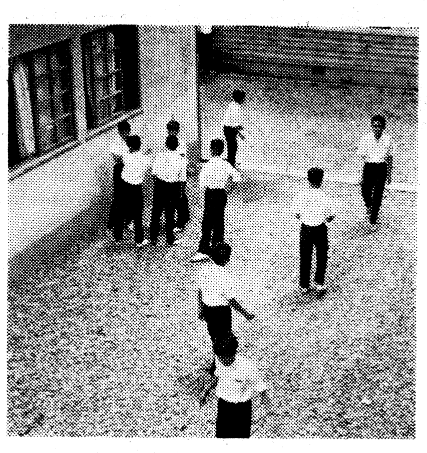
**E君の場合**ーめしを食う。ぼんやりしている。

今までの五つのタイプの中で、諸君はどれに入るだろうか。もっと違ったタイプがあるかも知れない。しかし、本校の生徒の多数はこの中のどれかに含まれるはずである。新聞部のとったアンケートから見ると、その中で最も多いのがA君のタイプである。とにかく休み時間ともなると教室、廊下を問わず、何人ものA君でギッシリ埋まっている。まさに休み時間は雑談の花盛り。いったい何が彼らを「雑談」へと誘うのだろうか。A君の意見を聞いてみよう。「休み時間というのは授業時間の間で頭を休めるために置いてあるんじゃないですか。それで、僕の場合、雑談や、なるべく授業に関係のない自由な話をして頭を休めようと思っているのです。」これはあくまでA君の意見ではあるが、雑談するものの共通な意見として認められるのではないだろうか。少くとも雑談には解放感があることはたしかであり、その意味で意識・無意識をこえて雑談はA君の意見のような役割を果しているといえそうである。

A君は「休み時間は頭を休めるためのものである。」という意見であった。本校生徒の大部分にはこの考えがあるようである。C君の意見を聞いてみよう。「僕はボンヤリしてるよりスポーツをやるほうが好きなんです。休み時間はやはり何かこう思いっきり運動して気分を爽快にするといいと思うんですがね。」C君の悩みは運動場に出られないということだそうである。「体育館ではあまり混雑して思うように運動できない。でも運動場に出るには時間がないでしょう。現状じゃとてもとても…」なるほど事実、休み時間に運動場を眺めて見ると広々としてきれいなものだ。「休み時間を利用して」などという人は一人もいない。裏をかえせばC君の意見通り「今の休み時間じゃ無理だ。」ということのようである。思いっきり遊びたくても遊べない。その欲求不満のおさえられない状態がD君の場合となって表われているのではないだろうか。D君の説明によると、いろいろの方法があるそうである。相撲、ピンポンで屋根上げ、チョークの投げ合い、鬼ごっこ、インスタントベィスボール……等々。なるほどそういえば良く廊下などでやっている。しかし考えてみるとこれは危険である。まずガラスを割る危険がある。ボールが人にぶっつかるかもしれない。鬼ごっこでも同じだ。D君の意見はこうである。「そりゃ、ふと、ああこれはしちゃあいけない。と思う時があります。でもおもしろいものだから、つい……」おもしろさ……、これには魔力がある。現状のままではD君のような場合が消える可能性は少しもない。まだまだこの室内競技は衰えることはあるまい。

さて、本校生徒の大部分はその方法いかんにかかわらず「頭を休める」という目的で休み時間を使っているようである。ところがここに反主流派がある。つまりB君のタイプである。B君の意見によると休み時間は勉強につかうべきだという。「休み時間、休み時間といってそう騒ぐ必要もないと思います。休み時間は次の授業の予習や、それから自分の勉強などに使ったほうがいいんじゃないですか。そのほうが時間を有効に使っていると思いますけど……」眼には移らないが、アンケートによると、休み時間を予習に使っている人は案外多いようである。その中の一人である某君はこういう意見をもっていた。「休み時間は自由に使ったらいいんじゃないですか。遊びたい人は遊ぶ。勉強したい人は勉強する。それでいいんじゃないですか。」

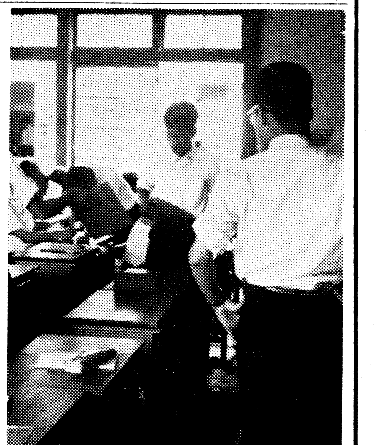
雑談。勉強。スポーツ。いろいろの使用法がある。しかし記者がこれらのことから考えたことはこうである。スポーツをしたいものは時間的に無理。そして他のものは雑談、読書、勉強……と室内的なものに休み時間を費している。概して本校生は閉じこもりがち、ここにも本校の特色が如実に示されているような気がしてならないのである。



運動場は遠すぎる

教室は雑談の花盛り

（右下）机、即ち卓球台？



---

**大学合格者**

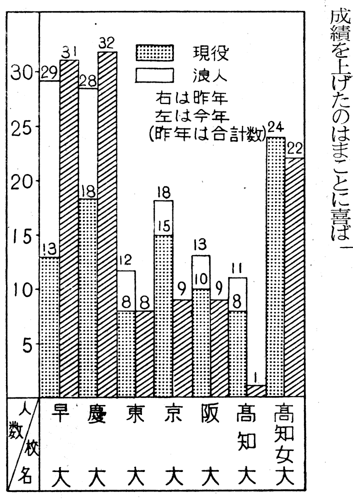
# 大幅な増加

## 〝壁〟を破った今年の入試

昭和三十九年度の本校生（浪人を含む）の進学状況が指導部から発表された。それによると受験者数は四三九名、進学者数は三〇九名でこれを昨年と比べてみると、進学者数は四五名の増加を見せている。また、合格率も昨年の六三パーセントを大きく上回る七〇・四パーセントとなっている。（なお、合格者の延べ数は四三三名である）学部別にみると工学部が八四名、経済学部が七〇名、文学部が六一名、法学部が四三名で、その他の学部を大きくひきはなしている。

今年の特色は、現役の進学者が大きく増加したこと、国立大学への合格者数が増えたことである。特に東大、京大、阪大への合格は現役、浪人を合わせて各々十名を越え、今までの壁を破ったともいえる。さらに昨年は一名しか合格者を出さなかった高知大に二一名が合格し、七名だった一橋大には、一名が合格するという変動も見られた。しかし、全般的に見ると、今年の進学状況はかつてないほどのよい結果であった。

**山岸先生談**　今年の大学入試にこんなによい成績を上げたのはまことに喜ばしいことで、〝やればできる〟という大きな教訓も残してくれた。今年受験した生徒は一般にあまりできがよくないといわれていたが、皆が努力したのでこんなによい成績を上げたといってよい。今年の高三もこの先輩達に負けないようにがんばってほしい。



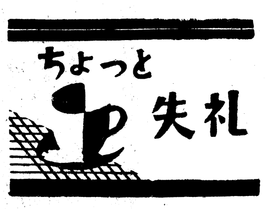
---

## ★★★★★ 他校新聞から

「男女共学は男子を紳士にした」と、云われている。女子を意識してかどうかは知らないが、清潔で素朴な服装は、誰が見ても文句はない。それ以上に、男女一緒の合唱コンクール、フォークダンス、体育大会、ホーム・ルームにおける精神的なゆとりは、なにものにもかえがたいよさがあるだろう▼しかし、男女の数さえそろえばよいと思うのも、的をはずれている。同じ能力の者が同じ屋根の下で、勉強し、語りあうのも重要の男女同権をなんにでも適用させようとする人もいるが、男と女では、勉強に対する態度もちがうらしい。「ボーイズビーアンビシャス」女子には、用がないのか。つまり男は、一人前になると、家族の飯を食わせなくてはと思い進学にも必死だ。そのため、入試に失敗して自殺するバカモノもいる。女子は、高校へ行くのも花嫁修業、せいぜい知性と教養のあふれる近代なお嬢さんを脳に描いているのではないか。この世代死亡率トップの自殺も、ロマンチックに考えているのではなかろうか。（明高新聞第八十八号「周期律」より）

高校生はあくまでも高校生だ！太腹な政治家や意気地無しの公務員でもなければ卑怯なペテン師でもない。未熟な未完成な心身を持ち合わせた素晴しい人類である。未熟ゆえに純真で美しく、未完成だからこそ元気で、積極的で研究心が旺盛である。（木更津高校新聞第百七号「金鈴」より）

---



### 西川先生 の巻

# 自分なりの創作を

## 結婚前から恐妻家

お城の北二キロ、南万々にある西川興亜先生のお宅を訪問した。四月に結婚し、新居に移転したばかりであった。先生にきれいな部屋に通されたが、庭はまだ木屑が残っていて、木のかおりが、こころよく鼻をついた。

先生は本校三十三回生で、西先生は一年先輩、石谷先生は二年後輩である。先生は美術担当で、現在一Dの主任をしておられる。

窪川町興津に生まれた先生は、潮騒を子守歌にしたかどうかしらないが、とにかくスクスク育った。よくイタズラもしたそうである。「僕の家に舟があったので、それに米やしょう油や塩など、それに炭をもってよくサザエやサカナツキに行ったものだよ。おもしろかったね、あの頃は。」と昔を思いだされていた。

土佐中に入学すると、一時、生物部に入っていたが、まもなく小学校の時から好きだった美術部に入った。やはり好きというだけあって、ずいぶん活躍したそうである。「事務室にかけてある鏡は僕のいた時に、学校賞としてもらったのだよ。」なるほどそういわれてみると、なんとなく年期の入った鏡だと思われて来た。

大学は芸大を受けたが失敗、翌年武蔵野美術大学と芸大とを受けた。芸大はまたしても落ちたが、武蔵野にパス。その後も芸大を受けたが、失敗しついにあきらめたそうである。「いつも三次試験に失敗したね。でも、もし芸大にパスしていたら、彼女と一緒になれなかっただろう。」と奥さんの方を、優しい目で見やりながらおっしゃった。奥さんとは、大学時代同じ彫刻科にいて知り合ったそうである。「奥さんは恐いですか」との質問に「恐いね。結婚する前から恐かった。」いまからこれでは先が思いやられると、記者一同不安のまなざしで先生を見る。先生の短所や長所はと伺うと、「長所は誰にでもやさしいわね。やろう思ったら最後までやるんじゃない？、短所は少し短気ね。」と奥さんが代弁して下さった。やはりこういうことは、本人よりも奥さんの方が良くわかっているらしい。「僕が一番短所と思っているのは、本を読んでいないことだね。これからどんどん読もうと思っているが……」とは先生の感想。

今、先生の一番したいことは、早く自分の仕事を始めたいそうである。「興津の家に大きな木があり、ちょうどアイディアも浮かんでいるので、それを一年がかり位でつくりたいと思っている。」と意欲をもやしていた。しかなんといっても一番の希望は、多くの若い芸術家がもっているように、フランスを中心にヨーロッパに行くことである。「最近感動したものは、どんなものですか。」という問に、一寸考えておられた後に「外国のものは、ピカソのデッサン展やゲルニカ展に深い感銘を受けたね」その時、記者の一人が、「ピカソとなると、何かバカラシイ感じがしますね」と言葉をはさむと、バカラシイといえば皆バカラシイね。なぜ絵をかくのか考えると……」とおっしゃる先生の表情は少し暗くなっているように感じられた。実際、芸術というものを完全に理解することはむつかしいことである。一生懸命仕事をしていても、ふと、そのような疑問がわいて来ることがあるかもしれない。

最後に、仕事に対する先生のお考えをお聞きした。「なにをつくるにせよ、良く物を見て、自分なりに解釈したものをつくりたい。そしてしっかりとした基礎をおいて、深く追求したい。ただ線を引き、色を塗ったりしたものには、虚しさを感ずるね。」と語られた。このことは、我々にも通じるのではないか。

雨はまだ降っていたが、遅くなったので先生ご夫妻に見送られておいとました。

（M・Y）

ゆりのような奥さんと共に

---

## オリンピック休暇実現する

十月十日から二十四日にかけ、東京において、東洋初のオリンピック大会（第十八回）が開催される。この間本校では先生方および生徒にオリンピックを充分に満喫してもらうという目的で、一週間の休暇を設けることが、このほど職員会でほぼ決定された。

この案が出されたのは昨年、入場券が売り出された頃で、それに対して新聞部では、生徒の意見を聞くため、アンケートをとった。その結果は賛成者が多く、理由として入場券は買いたいが授業があるため見に行けないという意見や長い二学期の中休みとして快適であるなどの要望があったためにこの案がほぼ決定された。これによると、臨時休暇を十月十九日から二十四日までの一週間置くことにしたが、この期間については最終的な決定ではなく、事情により多少変更されることもありうるということである。なおこの休暇の前提である夏季休暇の削減は、終りの十日間を削ることになった。この決定に対し生徒の大部分は賛成であったが、運動部から夏休みの練習日数がかなり少なくなるという反対 の意見もでていた。

**西野先生談**　生徒が何人くらい見に行くかは予想していないが、無理に見に行かなくても、家庭でテレビを見るだけでも世界的な行事に少しでも接することができるだろう。

---

# 新任紹介

## （明坂　石谷　山中　先生）

**明坂寛先生**（理科）

戦前、朝鮮において無煙炭の燃焼装置の新案特許をとられた大へんな発明家でいらっしゃる。趣味は釣り、写真、日曜大工などだそうである。

経歴…高知師範を経て、久重小学校等で教べんをとられた後この学校へ。

明坂先生談

この学校は秩序が整い、生徒諸君の態度がりっぱであると思います。私は皆さんに何かの目的に向って、あくまでもそれを探究するような人になってほしい。

**石谷熙子先生**（しがいひろこ）（英語科）

高校時代は大いにやりたいことをしてたのしみ、大学時代はアルバイトをしてその貯めたお金で日本三景を回ったという。

趣味は華道、音楽鑑賞、旅行、レース編み等……。

経歴……本校第三十五回卒業生、昭和三十五年、高知大学文理学部文学科入学。同三十九年、文理学部英文科卒業後、本校に赴任された。

石谷先生談

あなたたちは若いから学生時代は、大いにやりたいことをやった方が、後になってたのしい思い出となるでしょう。

前より生徒達が少し明かるくなったような気がします。

**山中三男先生**（生物科）

学生時代は大いに遊んでプールで泳いでいたため「カッパ」というあだ名があるとか――。

現在花粉の研究をしており、死ぬまでに一度ヒマラヤへ行きたいとか。趣味は山登り、スポーツ観賞そして寝ること。

経歴…高知大文理学部理学科、生物学専攻、東北大学院理学研究科、生物学専攻。

山中先生談

土佐高に来ておどろいたことは生徒の授業態度が大へんよいこと。しかし難を言えば、男女の生徒数が同等くらいがいいんじゃないかと思う。

明坂先生
右下、山中先生
左下、石谷先生

---

# 修学旅行の思い出

### 三C　植田信広

四月二十六日、八時十九分、汽車は予定通り高知駅に到着した。「アーア」と、大きなアクビを一つしておいてから車内を見まわすと、六日ぶりに帰って来たのだというなつかしさからか、大部分の人が「ホッとした。」とでも言いたげな表情を示していた。しかし僕は楽しくロマンチックで夢のような旅行はとうとう終わってしまったのか……。」と思うと、やり場のない寂しさで胸がいっぱいになり、ひどくもの悲しい気分に襲われていた。汽車から降りてホームの外に出、そこで小雨の中で我が子を待っている出迎えの人の波を見た瞬間、僕は決定的に夢の世界から現実の世界へ引きもどされた。あの瞬間に、六日間にわたる修学旅行は終止符を打たれたのだ。

思えば本当に楽しい旅行だった。別府、阿蘇、福岡、宮島、広島、どこもとても素晴らしかった。気に入らないところを見付け出す余裕なんか全然ないくらい有頂天になって旅行を楽しんでいたのだから。そしてこの旅行、僕にとって、二度目の北九州路だったが、そんなハンディを少しも感じさせないほど見るもの、聞くもの、全く新鮮な魅力に富んでいた。団体で、しかも級友等と一緒に旅行をするってことが、こんなにも自分を興奮させているのかと思うと我ながら驚き、そして少し恥ずかしく思った位だった。わけても大阿蘇の雄大な景色は、曇り空で冷たい小雨がパラつき、火口はおろか、向かい側の岩肌さえも見えないような悪い状態であったにもかかわらず、三年前に見た時よりもずっと豪快で雄々しく感じられた。これで、この上に空が晴れていたらもう何も思い残すことはないのだがなア……と意地悪な天を恨めしく思ったことだった。そのうちにいつの間にか出発時刻になり、僕は名残りを惜しみつつバスに乗りこんで阿蘇のお山に別れを告げた。「何年か後にもう一度必ずやって来るからな。そしてその時こそは、三度目の正直、きっとお前の雄大で美しい火口を見せてもらうからな。」と心の中で阿蘇と約束して……。

我々がその日（二十三日）の夕方、福岡の宿に着いたのは五時過ぎだった。楽しい旅とは言え、少し疲れた僕は、夕食後しばらくの間は友達と四人でトランプに興じた。八時頃、三人でタクシーを拾って外出した。夜もふけて余り人通りも多くない商店街をブラついていた時、僕はふと、この見知らぬ福岡の街に旅愁を感じて、泣きだしそうな衝動に襲われた。何というか非常にロマンチックなムードなのだ。僕は旅行して、こんな感情を味わうことが何よりも好きだ。

その夜は同室の者ほとんどが興奮して楽しい話に花を咲かせ、寝ついた時はもう一時頃だった。

次の日は、福岡市内と太宰府の見学をして、宮島泊。いよいよ帰途についたわけだ。帰りたくない このまま北九州に残って、もっともっとあきるほど、旅を楽しみたいと何度も思ったけれど、どうしょうもない。心の中に「楽しい旅行もとうとう終りに近づいたなア」という「わびしさ」を抱いて、帰途についた。

アア、あれから早や一ヵ月半もたった。しかし僕はまだあの素晴らしかった北九州の修学旅行を忘れ去ることが出来ない。

---

# 〝まず信用第一〟

## 正直にサーヴィスに

### 6回生　浜田麟一さん

七年前から御菓子製造、販売を始め、今や多忙な毎日を送っておられる『浜幸』の御主人、浜田麟一さんのお宅を記者一同小雨の中を訪ねた。

お部屋に案内され、座ブトンの上でかしこまっている我々に、「どんなことを云ったらいいですかね。」と、眼鏡を隔ててやさしいまなざし、「ええ、どんな事でも結構です。」と言うと、「そりゃあ困るねえ、主題を決めておかんといかんでしょう。」とは、われわれ新米記者にはおきついお言葉、「それにねえ、私はどうも雑談というのが苦手でしてねえ。」と、おっしゃられるが、なかなかどうして……。「大学を出られてすぐこの職業を……。」と記者、「いやいや、私はねえ……どうも遊んで暮らしたんで、あまり云いたくないんですがねえ。」と、云いそびれながらも。次々と答えて下さったのによると、本校（六回生）、高知高を出られた後、父上のご要望により、京大法学部に三年間在籍したが、事情変って中途退学、東大文学部に移り、東洋史を専攻せられた。卒業後は、東大講師を歴任、戦時中は、本校で教鞭をとられたこともあるそうだ。戦後は土地が手に入ったのと、ご先祖が『浜幸』という呉服商をやっておられた関係上、商売を始める気になったのだと言う。

ようやく、女性？記者の間に出だしたとたん「あなた達は、将来結婚生活を送るようになるわけですけど、きれいな言葉を使うよう今から心掛けておかんといかんですよ。」との御言葉に、二の句が出なかったのはいうまでもない。話が途切れて、困っている我々に、「私は商売人ですから、商売の話でも聞いたらどうですか。」と、次々先を越されて質問されては、記者の面目もあったものではない。その上「あなた達は、商売というものをどう思いますか。」とまた質問、一人が「一般には何か不純なものと言った感じがあるんじゃないでか。」と、答えると、「そうですねえ。確かにそういうことが言えますねえ。というのはですよ、江戸時代の身分制度だってそうでしょう。『士農工商』商売が一番卑しいとされていたでしょう。事実、昔の商売人は、人を欺して利益を上げるといったようなことが当然のことのように行われていましたですよ。それに、日本だけではありません。例えばドイツ語では『欺す』と『商う』との語のつづりが同じなんです……。」と、話ははるかヨーロッパにまで発展、「……しかし今はそうはいきませんですよ。昔と違って一回きりではなく継続的ですからねえ。まず、信用第一です。そのためには、正直に、サービスに……、現代人は全てサーバントですからねえ。現に商売人は謙遜な態度でサービスしているでしょう。」……「それに、もし商売人がいなかったとしたらどうでしょう。……そうしたら、生産が止まる。すると衣食住にさしつかえる。そうすれば……。」ここまでくると、記者一同納得がいたか、いかぬか、目にシワを寄せて考えて？いる。

少々遅くなったが、この辺で一寸本職のお菓子のことについて一寸言「よく、人々の中に『浜幸、おまんもうけるのう』という方がございますが、とてもそんなわけにはまいりませんですよ。……といっても少しは頂いておりますが……。」とのこと。「お菓子を製造する上で、どんな点に一番注意を払っていますか。」……久々に出た我々の問いに多くを語ってくれた。「……私は旅が好きですから、よく出かけるんです……。」その時に得た『各地の銘菓の知識』をもとにし、包装紙や名前等に工夫をこらし、郷土色を添えているという。そういえば『潮騒』『かんざし』『開運小判』等を例に上げてみると、みなさんも、よく判るような気がするでしょう。それに、おなかのムシも鳴き始めたのではありませんか。……「ギクッ」……『腹がへってはいくさができぬ』……おたがい読むことも、書くことも、この辺でおきましょう。

（M・S）

古風なお庭でちょっと

ヒフ病薬　新薬は
はりまや薬局
はりまや橋四国銀行本店前 TEL ②2665

天狗堂メガネ店
本町 TEL ②1678

紳士服装センター
レジャースポーツ
土佐高制服オーバー指定店
廣松屋
高知大丸北口前 TEL ②2338・1527

高知一の定評　うまい鮨は
菊寿し
電話 ②3366 ③3030
お二階も一般席ですので
お気軽に御利用下さい

TEL ②0105・0106
すし柳
高知市南ハリマヤ町

校友の店
クツの 高雅堂
高知市帯屋町一丁目 TEL ②2960